

# ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本 1927 番

## 第 1-2 葉に関する記述

A Further Description of Cod. Vat. gr. 1927, ff.1-2: A Comparison with Marginal Psalters

辻 絵理子\*

TSUJI Eriko

ヴァティカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番は、ビザンティン世界で制作された挿絵入りの詩篇写本である。全 289 葉に 145 もの図像を有する貴重な作例だが、その独特の図像体系には比較対象となる写本が現存しない。そのため 1940 年代のモノグラフ出版の後は、旧約の王ダヴィデの表現に着目した分析などは見られたものの、写本全体を取り上げて各挿絵と対応する本文を詳細に検討する包括的な研究は為されてこなかった。本稿では同写本のテキストと挿絵を突き合わせ、同じ章句に挿絵を有する他の詩篇写本作例と比較しながら、紙幅の許す限り分析を進めていく。

キーワード：ビザンティン美術、写本挿絵、詩篇

### 序

旧約聖書の「詩篇」を本文とする写本に挿絵を描く時、ビザンティン世界では大きく分けてふたつの形式を採ったとされている。全頁大の豪華な挿絵を持つ貴族詩篇<sup>1</sup>と、本文を綴じ側に寄せて L 字・逆 L 字型の余白を設け、そこに挿絵を施す余白詩篇<sup>2</sup>である。これらの呼称については註釈が必要ではあるが、今も有効な分類と言える。予め用意された一葉にひとつ、ないしは枠線で区切ってふたつの画面を描く貴族詩篇に対して、余白詩篇は本文の周囲に自在に図像を配することが可能であるだけでなく、特定の章句を選んで挿絵との結びつきを示す記号を付け、図像との直接的な関係を示すことさえする。一部の挿絵は本文の内容をそのまま図解したものではなく、写本内に書かれていないテキストの予備知識を前提としており、何故そこに描かれるのか不可解な図像も確認されている。扉絵や章の冒頭に配されることが原則となる貴族詩篇の挿絵が、続く本文にかかる見出しのような機能を果たすとすれば、余白詩篇の挿絵は個々の図像こそ小さいものの、「註解挿絵 Commentary Illustrations」<sup>3</sup>と呼ばれるに相応しい複雑な機能を有している。

\* つじ・えりこ、埼玉大学准教授、西洋美術史、ビザンティン美術史

<sup>1</sup> ティッカネンは挿絵入りのビザンティン詩篇写本を、全頁大の豪華な挿絵を有する Die aristokratische Psaltergruppe（貴族詩篇群）、余白に挿絵を描き本文と直接結びつける Mönchisch-theologische Redaktion（修道院・神学的編纂）に分類した。Tikkanen, pp.112-147. 貴族／修道院を対比させるこれらの用語が適切かどうかという問題についてはカトラーやラウデンが論じているが、現在も（「いわゆる」と括弧付きではあるが）「貴族詩篇」が用いられている。ケスラーは Fronticepiece Psalter という呼称を用いたが、定着しなかった。Kessler, pp.31-33. 一方「修道院詩篇」に関しては、挿絵の形式で呼ぶ「余白詩篇 Marginal Psalter」が主流となっている。Cutler, pp.7-9; Lowden, pp.242-260.

<sup>2</sup> Scepkina; Dufrenne, 1966; Der Nersessian; Corrigan; Barber; 辻.

<sup>3</sup> Weitzmann, pp.118-122.

本稿で主に扱うヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番 (Cod. Vat. gr. 1927、以降「1927 番」)<sup>4</sup>は、前述 2 分類の定義に収まらない孤立した作例である。1 コラムに収められた詩篇本文にコラム幅の挿絵がランダムに挟まる挿絵形式を持つ。制作年代の手がかりとなるパスカル・テーブルやコロフォンは現存しない。様式から 12 世紀前半の制作とされてきたが<sup>5</sup>、一部の図像を同時代の出来事の反映と見て 11 世紀末とする説もある<sup>6</sup>。図像の数が多く、金や顔料が豊富に使われており、所蔵館でも貴重写本として扱われている。しかし比較対象にすべき類例が現存しないためか、前世紀半ばに出版されたモノグラフ以降大きく取り上げられることなく、写本全体の包括的な研究は為されていない。

同じく孤立した作例ではあるが、同じ写本室所蔵の Cod. Vat. gr. 752 (以降「752 番」)<sup>7</sup>は 1927 番との関係が指摘されている。同写本は詩篇本文ではなく、欄外註として記されたエルサレムのイシキオスをはじめとする教父註解の間にコラム・ピクチャー形式の挿絵が挿入されており、1927 番以上にこれまでのアプローチとは異なったやり方で分析されるべき独自の構成を有する。パスカル・テーブルが残っているため 1059 年頃の制作であることが判る。欄外註の翻訳プロジェクトが計画されるなど、主に神学的な側面から近年再注目されている<sup>8</sup>。同写本の総合的な研究については欄外註をはじめとする神学研究の成果を俟たねばならないが、テーマを絞った分析としては、旧約の王にして詩篇著者と目されるダヴィデの表現から同時代の出来事や皇帝への批判の文脈を探った 752 番の研究と、それを踏まえつつ 1927 番の特徴と比較検討した研究などがある<sup>9</sup>。

本稿は 1927 番の全ての図像の記述と本文との対応関係の分析、同じ章句に挿絵を有する現存作例の比較検討を通して、同写本の全体像を明らかにする試みの第一歩である。図像とテキストの膨大さに対し、紙幅の制限があるため一本の論文に収めることは叶わないが、オンライン誌ならではの利便性もある。各国写本室の所蔵する写本群は、オンライン上でカラー図版の一般公開が進められている。1927 番も全頁が掲載されており、細部の拡大も自在であるため、比較作例と併せて適宜参照されたい<sup>10</sup>。同写本の挿絵はその殆どが矩形に収められているが、多くは枠線の縁取りがされていない。背景は金地で、下方 4 分の 1 以下を緑の帯で塗り分けることで絵画空間を示している。

## ビザンティン余白詩篇の挿絵の分類

1927 番の記述に入る前に、先に触れた余白詩篇の本文と挿絵の関係性について簡単に述べておこう。同挿絵形式の成立と発展には首都コンスタンティノポリスのストゥディオス修道院の関与があると考えられている<sup>11</sup>。11 世紀末から 12 世紀にかけてのストゥディオス修道院では、質の高い余白

<sup>4</sup> 245×185mm、全 289 葉 (欠損フォリオあり)、37 クワイアが現存、145 図像。De Wald, 1941; Trahoulia.

<sup>5</sup> De Wald, 1941, p.2.

<sup>6</sup> Trahoulia, p.567.

<sup>7</sup> De Wald, 1942; Karavrezou, Trahoulia and Sabar; Crostini and Peers.

<sup>8</sup> 2012 年にローマで 2 日間に亘って開催された国際シンポジウムの成果が出版されている。Crostini and Peers; Crostini, 2019.

<sup>9</sup> Karavrezou, Trahoulia and Sabar; Trahoulia.

<sup>10</sup> ヴァチカン図書館デジタル・コレクションズ <https://digi.vatlib.it/mss/> (最終閲覧日 2020 年 12 月 19 日)、

大英図書館デジタル化写本 <https://www.bl.uk/manuscripts/> (最終閲覧日 2020 年 12 月 28 日) どちらも写本番号で検索が可能。

<sup>11</sup> トラフリアは 1927 番と同修道院工房の関係を指摘している。Trahoulia, pp.565-567. 後述する現存最古の余白詩篇である『クルドフ詩篇』は、コンスタンティノポリス総主教座のスクリプトリウムあるいはストゥディオス修道院工房の制作であるという説がある。制作年代は 843 年から 9 世紀末までとされてきた。コリガンは、グラバアルらの挙げる総主教フォティオスの在位期間の制作という説を採らず、総主教メトディオスの在位期間に制作されたものと推測している。Corrigan, pp.124-134.

詩篇が制作されていた。1927 番の制作者が余白詩篇の構造と特性を理解していた可能性は極めて高い<sup>12</sup>。異なる修道院の工房作であったとしても、詩篇本文に対し様々な挿絵を配するという構成を生み出した人物が、200 年以上前から存在し、継続して制作されていた同じジャンルの作例に一切触れなかったという可能性は低いと思われる。何にせよ、これらと比較検討することで得られるものはあるだろう。

ビザンティンの詩篇写本は、全 151 篇（最後の一篇は外典で、七十人訳<sup>セプトツァギンタ</sup><sup>13</sup>の補遺）の詩篇本文の巻末に頌歌<sup>オード</sup><sup>14</sup>を収録するのが、挿絵の形式を問わず一般的である。貴族詩篇は巻頭、詩篇を二分する区切りである第 77 篇開始、及び各頌歌の冒頭に挿絵を挟むことが多い。余白詩篇は本文周囲に自在に図像を配するが、作例によっては巻頭や頌歌開始に全頁大の挿絵やヘッドピースを置くものもある。詩篇本文は曖昧な歌の集積であって、常に具体的な物語を示唆するものではないが、余白詩篇には本文中で直接語られていない新旧約聖書の他の物語図像や、聖人伝の図像も描かれる。これらの図像は本文との関係において、概ね<sup>リテラル</sup><sup>ヒストリカル</sup><sup>タイポロジカル</sup> 字義的、歴史的、予型論的な図像の 3 つに分類されている<sup>15</sup>。リテラルは文字通り本文の内容を忠実に絵画化した図像である。最も単純な図像選択に思えるが、リテラルな図像に見えても、前後の図像と組み合わせると本文と並行して別の物語が語られている場所もあるため、注意が必要である。ヒストリカルな図像とは、詩篇本文と実際に起きた出来事とを結び付け、史実に基づく脚色された図像を描くものである。例えば本文に出てくる不信心な者たちを<sup>イコノクラスム</sup> 聖像論争に関わった者たちに見立て、テキストの意味は壊さぬまま聖書の一部と同時代や歴史上の現実に関わりを持たせる手法である。タイポロジカルはクリストロジカルとも呼ばれ、旧約聖書の一部である詩篇に対し、予型論的な解釈に基づいて新約図像を描く箇所である。予型とは、新旧約聖書に見られるモチーフの類似や、新約の内容を予め語っていたとして引用される旧約聖書の一節による両者の結びつきのことで、旧約を新約の予告と見做して、新約の権威を保証し補強する考え方である。旧約詩篇に対し新約図像が註釈もなく描かれるこれらの写本群は、鑑賞者に予型論的解釈と、羊皮紙には書かれていない典拠の知識を要求している。具体的な作例については、各図像の記述をする際に本文と併せて詳しく見ていくことにしよう。

## f.1<sup>16</sup>

1927 番は f.1 から本文である詩篇第 1 篇が始まる。制作当初は序文やパスカル・テーブルなどがこの前にあったものと思われるが、現存しない<sup>17</sup>。本文コラムの 3 分の 2 ほどを占める四角いヘッドピースは赤い枠で縁取られ、四隅を植物文が飾っており、矩形の中には四葉型の枠が収められて

<sup>12</sup> ビザンティン世界の作例には、注文と制作に関わるあらゆる資料と史料が残っていないことが殆どである。ここで「制作者」と呼ぶ時は、写字生、画家、彼らに指示し制作の全体を監修した恐らく高位聖職者の、全てが含まれる。

<sup>13</sup> 写本に書かれた本文は七十人訳<sup>セプトツァギンタ</sup>で未だ邦訳がない。本稿で引用する詩篇は以下を参考にしてている。Brenton; Rahlfs; Pietersma and Wright; 『旧約聖書 IV』、『聖書』。また、邦訳の依拠するヘブライ語原典とは章句番号がずれる箇所がある。

<sup>14</sup> 主に旧約聖書の散文から韻文テキストを抜粋し編纂したもので、預言者や聖母が神に詠う讃歌や祈禱文である。J. Lowden, s.v. "Odes," *ODB*, pp.1511-12.

<sup>15</sup> 辻、3-10 頁。

<sup>16</sup> 図像はこれ以降も前出註 10 参照。

<sup>17</sup> オリジナルには存在したが、欠損した可能性がある。De Wald, 1941, p.3, Psalm.1; Trahoulia, pp.552. 筆者は同写本を実見しているが、クワイアは f.1 から始まるクアテルニオンとなっており、失われた部分は別個のクワイアを構成していたと考えられる。

いる。枠内の剥落は著しいが、辛うじて坐像の人物の左右に人が立っていることが窺える。金彩の一部のみが残る中央の坐像は恐らく詩篇作者と見做されていたダヴィデで、両隣の人々は現存する他の挿絵入り詩篇写本から、楽師である可能性が高い。本文冒頭 Μακάριος 一文字目のミュが装飾文字になっているが、金の輪郭のみで彩色は殆ど残っていない。

このような巻頭挿絵は余白詩篇にも確認されており、『クルドフ詩篇』(Moscow, State Historical Museum, Cod. gr. 129d) 18f.1v では、大きなアーチの下に無髯のキリストのメダイオン、豎琴を持つ坐像のダヴィデが描かれ、周囲を共著者や楽師たちが囲む様を全頁大の挿絵にしている。『バルベリーニ詩篇』(Cod. Vat. Barb. gr. 372) 19f.5v もまた全頁大で、金地に植物文の枠の上段に坐像のキリスト、下段に白い板を持った老人<sup>20</sup>に挟まれた坐像のダヴィデが豎琴を持ち、最下段に楽師たちと、両手を広げて踊る人物が描かれている。向かい合わせになる f.6 の本文タイトルに Π 字型の装飾が施され、余白には日の老いたる者や、第 1 篇に言及される人物も描かれて、非常に華やかな見開きである。これらの作例を踏まえると、ほぼ剥落している 1927 番の中央のダヴィデも、豎琴を片手に詩篇作者として扉絵に登場していたと考えるのが妥当であろう。

## f.2<sup>21</sup>

挿絵の直前に「ヘブライ人についてのタイトルのないダヴィデの詩 Ψαλμός τῷ Δαυιδ ἀνεπίγραφος(ς) παρ' ἑβραίοις」という題詞代わりの文章が、金のミナスキュルで書かれている。第 2 篇はかつて現在の第 1 篇と合わせて巻頭詩とされ、全体の序であったゆえに題詞が置かれなかったという<sup>22</sup>。勿論セプトゥアギンタのテキストにもないため、ドゥヴァルトのモノグラフや他の研究には言及がない。しかし次に挿絵が施される f.3v 以降の正式な題詞と全く同様の表現が成されているため、記しておく。絵の下に続く本文は第 2 篇で、Ἰνα の一文字目イオタにのみ簡素な装飾が施されている。どちらも金が剥がれ、下塗りの赤い線が覗いている。

二段に分けられた挿絵には外枠がなく、金地背景と緑の帯によって上下の空間が区切られている。これもまた傷みが激しい。上段中央には王冠を被ったダヴィデが立ち、頭上に天を表す青い弧が、背景の金地からはみ出して欠けた月のような形で描かれている。剥落のためモノクロームのようにも見えるが、その中には薄っすらとキリストの上半身が確認出来る。ダヴィデの両脇にはそれぞれ青いニンブスをつけた人物が玉座に坐り、群衆に右手を伸ばして発話の身振りをしている。左側の坐像の人物の背後には、盾を持つ兵士が立つ。詩篇 2 : 2 「なぜ、地上の王たちは立ち上がり / 君主らは共に謀って / 主と、主に油注がれた方に逆らうのか」の章句の一部「君主らはともに謀る οἱ ἄρχοντες συνήθησαν ἐπὶ τὸ αὐτό」が、挿絵の右余白に残っている。天を表す弧の右隣に「天に住まう方 ὁ κατοικῶν ἐν οὐρανοῖς」の銘を確認出来る。銘はどちらも青字である。

下段は画面左に玉座の王、その両隣に立って何事か囁く群臣たち、布で頭を覆った人々、右には

<sup>18</sup> Scepkina; Grabar; Corrigan; Fanar; 高; Evangelatou.

<sup>19</sup> De Wald, 1944; Spatharakis, pp.26-36; Anderson, 1983; idem, 1989.

<sup>20</sup> 『クルドフ詩篇』、『バルベリーニ詩篇』共に、楽師以外に共著者らしき人物を描く。De Wald, 1941, p.3.

<sup>21</sup> De Wald, 1941, p.3, Psalm.2.下方余白に 15 世紀の書体と思しき書き込みが残る。

<sup>22</sup> 『旧約聖書 IV』、5 頁、註 2。

坐る者と立つ者ふたつのグループに分かれた群衆と建築モチーフが窺えるものの、傷みが激しい。詩篇 2 : 10-12 「王たちよ、今こそ悟れ。／地上の裁き人らよ、論しを受けよ。／畏れつつ、主に仕えよ。／震えつつ、喜び躍れ」に対応すると考えられている。

ドゥヴァルトは上下段ともに王たちの特定をしない。トラフリアは、望ましくない支配者の例示としてのヘロデとピラトである可能性を指摘する<sup>23</sup>。2 : 2 に挿絵を描く余白詩篇は数例あり、『クルドフ詩篇』f.2v では無名の坐像の人物 2 人と傍に立つ 1 人が語り合う。『バルベリーニ詩篇』f.7 もこれに近い構図だが、金字で「キリストに対して騒然とする（騒ぎ立てる）ヘブライ人 *οἱ ἑβραῖοι φρουρατώμενοι κατὰ τοῦ χ(ριστο)ῦ*」と銘文が書かれる。『テオドロス詩篇』(BL, Add. 19352)<sup>24</sup>f.2 には、坐る 2 人の王の前にヘブライ人が立ち、彼の指し示す下方に、カイアフアとアンナスの前に立つキリストが描かれる。これはキリストの審問から主要な登場人物だけを抜き出しており、地上の王と君主らが「共に謀」っているのは、キリストに対する謀略であることが視覚的に示されている<sup>25</sup>。『ブリストル詩篇』(BL, Add. 40.731)<sup>26</sup>f.9 には群衆に囲まれて話し合う坐像の王たちが描かれるが、ヘロデとピラトの名前が銘として付されている。1927 番については『ブリストル詩篇』を踏まえたトラフリアの指摘通り、固有名詞が省かれ、支配者に対する教訓の章句に無名の王たちが描かれることで、過去や物語の人物ではなく同時代の現実の支配者たちに対する教訓的な要素を読み取ることが出来るだろう<sup>27</sup>。

ひとつ指摘しておかねばならないのは、図像との対応が言及されていない詩篇 2 : 1 「なぜ、国々は騒ぎ立ち／諸国の民は空しいことをつぶやくのか *ἵνα τί ἐφρούαζαν*<sup>28</sup> ἔθνη καὶ λαοὶ ἐμελέτησαν κενά」が、2 : 2 と併せて使徒言行録に引用されていることである。使 4 : 25-26 「あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。／『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち／諸国の民は空しいことを企てたのか。／なぜ、地上の王たちは……』」<sup>29</sup>、更に続く文章を確認すると、4 : 27-28 「事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、御手と御心があらかじめそうなるようにと定めていたことを、すべて行ったのです」<sup>30</sup>。これまでに確認した詩篇写本の制作者や鑑賞者は、詩篇 2 : 1-2 を読む際、その章句が使徒言行録 4 : 25-26 に引用されていることを想起し、それに続く文章もまた思い浮かべることが出来たであろう。この章句に対して、使徒言行録で言及される「共に集まって」「油を注がれた聖なる僕イエスに逆ら」ったヘロデとピラトを描くことも（『ブリストル詩篇』f.9）、空しいことを咄く「諸国の民」（2 : 1）をヘブライ人と置き換えることも（『バルベリーニ詩篇』f.7）、「御手と御心があらかじめそうなるようにと定めていたこと」

<sup>23</sup> 同章句のイシキオスの註解で語られる、審判の日に滅びる邪悪な支配者と重ねる。Trahoulia, pp.552-554.

<sup>24</sup> Der Nersessian; Anderson, 1988; Barber; Finlay.

<sup>25</sup> この図像配置によって、銘はないものの 2 人の王はヘロデとピラトに同定されている。Barber, f.2.

<sup>26</sup> Perry; Dufrenne, 1964, 1966; Anderson, 1994; Brubaker; 辻, 137-150 頁。

<sup>27</sup> 前出註 23 参照。

<sup>28</sup> 原形は φρούαζω、前述『バルベリーニ詩篇』f.7 の銘文を参照されたい。

<sup>29</sup> 『聖書』、(新) 216 頁。

<sup>30</sup> *συνήχθησαν γὰρ ἐπὶ ἀληθείας ἐν τῇ πόλει ταύτῃ ἐπὶ τὸν ἅγιον παῖδά σου Ἰησοῦν, ὃν ἐχρίσας, Ἡρόδης τε καὶ Πόντιος Πιλάτος σὺν ἔθνεσιν καὶ λαοῖς Ἰσραὴλ, ποιῆσαι ὅσα ἡ χεὶρ σου καὶ ἡ βουλή σου προῦρίσεν γενέσθαι.*

本稿は、JSPS 科学研究費若手研究 JP20K12857 (研究代表者：辻絵理子)、及び挑戦的研究 (萌芽) JP19K21718 (研究代表者：山崎敬一) の成果の一部である。



すなわちキリストの受難を描くことも（『テオドロス詩篇』f.2）、可能であった。参照してきた作例はどれも詩篇第2篇の本文しか羊皮紙に記さないが、その近くに描かれた図像と銘は、使徒言行録第4章への同章句の引用が、予備知識として鑑賞者に期待されていたことを示している。

紙幅が尽きたため一旦筆を擱くが、本稿では先行研究で着目されなかった箇所を幾つか確認することが出来た。引き続き各図像の詳細な記述と分析を続けたい。

## 参考文献一覧

- ・ J. C. Anderson, “The Date and Purpose of the Barberini Psalter,” *CahArch* 31 (1983), pp.35-67.
- ・ J. C. Anderson, “On the Nature of the Theodore Psalter,” *ArtB* 70 (1988), pp.550-568.
- ・ J. C. Anderson, P. Canart and Ch. Walter, *The Barberini Psalter: Codex Vaticanus Barberinianus graecus 372*, New York, 1989.
- ・ J. C. Anderson, “The Palimpsest Psalter, Pantokrator Cod.61: its Content and Relationship to the Bristol Psalter,” *DOP* 48 (1994), pp.199-220.
- ・ Ch. Barber (ed.), *Theodore Psalter: Electronic facsimile*, British Library, 2004.
- ・ L. C. L. Brenton, *The Septuagint with Apocrypha: Greek and English*, London, 1851 (rep.).
- ・ L. Brubaker, “The Bristol Psalter,” Ch. Entwistle (ed.), *Through a Glass Brightly: Studies in Byzantine and Medieval Art and Archaeology, Presented to David Buckton*, c.2003, Oxford, pp.127-141.
- ・ K. Corrigan, *Visual Polemics in the Ninth-Century Byzantine Psalters*, Cambridge, 1992.
- ・ B. Crostini and G. Peers (eds.), *A Book of Psalms from Eleventh-Century Byzantium: the Complex of Texts and Images in Vat. gr. 752*, Città del vaticano, 2016.
- ・ B. Crostini, “What are Psalter Catenae for? Considerations from the Vaticanus graecus 752 Project,” M. A. Barbàra and M. R. Petringa (eds.), *Letteratura Cristiana antica: Giornate in ricordo di Sandro Leanza*, Messina, 2019, pp. 74-86.
- ・ A. Cutler, *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris, 1984.
- ・ E. T. De Wald, *The Illustrations in the Manuscripts of the Septuagint, III, Psalms and Odes, Part 1: Vaticanus Graecus 1927*, Princeton, 1941.
- ・ E. T. De Wald, *The Illustrations in the Manuscripts of the Septuagint, III, Psalms and Odes, Part 2: Vaticanus Graecus 752*, Princeton, 1942.
- ・ E. T. De Wald, “The Comnenian Portraits in the Barberini Psalter,” *Hesperia* 13 (1944), pp.78-86.
- ・ S. Der Nersessian, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge II: Londres, add. 19.352*, Paris, 1970.
- ・ S. Dufrenne, “Le psautier de Bristol et les autres psautiers byzantins,” *CahArch* 14 (1964), pp.159-182.
- ・ S. Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge I: Pantocrator 61, Paris Grec 20, British Museum 40731*, Paris, 1966.
- ・ M. Evangelatou, “Liturgy and the Illustration of the Ninth-Century Marginal Psalters,” *DOP* 63 (2009), pp.59-116.
- ・ E. Fanar, “Visiting Hades: A Transformation of the Ninth-Century Byzantine Psalters,” *BZ* 99 (2006), pp.93-

108.

- P. Finlay, *Making and Viewing the Theodore and Barberini Psalters* (London BL.Add.19.352 and Vat.Barb.gr.372), diss., Queen's University of Belfast, 2005.
- O. Grabar, "A Note on the Chludoff Psalter," *Harvard Ukrainian Studies* 7 (1983), pp.261-269.
- I. Karavrezou, N. Trahoulia and S. Sabar, "Critique of the Emperor in the Vatican Psalter gr. 752," *DOP* 47 (1993), pp.195-219.
- H. Kessler, "The Psalter," G. Vikan (ed.), *Illuminated Greek Manuscripts from American Collections. An Exhibition in Honor of K. Weitzmann*, Princeton, 1973.
- J. Lowden, "Observations on Illustrated Byzantine Psalters," *ArtB* 70 (1988), pp.242-260.
- M. P. Perry, "An Unnoticed Byzantine Psalter," *The Burlington Magazine* 38 (1921), pp.119-128; 282-289.
- A. Pietersma and B. G. Wright (eds.), *A New English Translation of the Septuagint and the Other Greek Translations Traditionally Included under that Title*, Oxford, 2007.
- A. Rahlfs, *Septuaginta: Id est, Vetus Testamentum Graece iuxta LXX interpretes*, vol.1, Stuttgart, 1979.
- M. V. Scepkina, *Miniatjura Hludovskoi Psaltyri: Greceskij illjustrirovannyj kodeks IX veka*, Moscow, 1977.
- I. Spatharakis, *The Portrait in Byzantine Illuminated Manuscripts*, Leiden, 1976.
- J. J. Tikkanen, *Die Psalterillustration in Mittelalter*, Helsinki, 1895.
- N. Trahoulia, "Vat. gr. 752 and Vat. gr. 1927: Related Manuscripts?" *The Complex of Texts and Images in Vat. gr. 752*, pp.547-567.
- K. Weitzmann, *Illustrations in Roll and Codex: A Study of the Origin and Method of Text Illustration*, Princeton, 1970.
- 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV』、岩波書店、2005年。
- 高晟俊「《フルドフ詩篇》(モスクワ国立歴史博物館所蔵 Cod. gr. 129d)に関する諸問題」、『新潟県立万代島美術館研究紀要』第2号、新潟県立万代島美術館、2007年、9-31頁。
- 聖書協会共同訳『聖書 旧約聖書続編付き 引照・注付き』、日本聖書協会、2018年。
- 辻絵理子『ビザンティン余白詩篇写本挿絵研究』、中央公論美術出版、2018年。